## 国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

# NEWSLETTER REPRESENTATION REPRESENTA

## 国際日本研究センター第32号 目次

◆与那覇大智展「固有時との対話 沖縄・基地・Home」/講演と対談 与那覇大智 + 小沢節子 ························· 1
◆第37回「外国語と日本語との対照言語学的研究 テーマ「ダイクシス」····································
◆東アジア連続講演会 第16回『境界と路上を考える』 在日韓国人政治犯救援運動の軌跡と課題 ··············· 5
<b>◆2022年度第1回研究会 インターネット利用におけるセキュリティ</b>
一日本語教師、学生・生徒、学校組織が安全に、かつ安心して活用する際のヒントー
◆第37回「外国語と日本語との対照言語学的研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
▲教育(教師 学生)と教材作成(問発を今ま)にかかわる薬作権・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【比較日本文化部門主催】

与那覇大智展「固有時との対話 沖縄・基地・Home」

展示期間:2022年12月5日(月)~16日(金)

講演と対談 与那覇大智+小沢節子

12月16日(金)17:30~

1967年に沖縄で生まれ、 米軍基地の存在を身近に 育った画家である与那覇 氏は、大学院時代に留学 したアメリカ・フィラデル フィアで目にした体験か ら遡行しながら、「Home」 と名付けられた一連の連 作を制作している。沖縄戦 を体験せず、1972年「復帰」 をめぐる社会運動のとこの にはまだ5歳であったこの



作家が、沖縄・米軍基地・そして現在の沖縄を再び自分の素材として受け止めていく過程が、作品に反映されているといえよう。この作品展は、本学の研究講義棟のガレリアにおいて開催され、10日間かけてこの第一線で活躍する作家の連作を一望できるまたとない機会であった。

同時に、2022年12月16日(金)には、与那覇氏と美術史の研究者でもある歴史家の小沢節子氏による講演と二人の対談も行われた。近現代美術史と沖縄絵画の歴史に与那覇氏を位置付ける小沢氏の的確かつ刺激的な講演と、丸木位里・丸木俊による大作『沖縄戦の図』が放つ筆〈線〉を見るこ

とに多くの時間を費やした与那覇氏の創作の背景にある情動的な体験も明かされ、濃密な講演会となった。ガレリアを利用した展示の効果もあわせて、講演会に参加した50名を超える学部生・大学院生にとってまたとない美術教育の時間となり、アクティブラーンニングとしても成功していたことを付け加えておきたい。

(友常勉)

The exhibition "Dialogue with Singular Time: Okinawa, Bases, and Home" by Daichi Yonaha was held at Tokyo University of Foreign Studies for twelve days, from December 5th to 16th, 2023. Yonaha, a painter who was born in Okinawa in 1967 and grew up in close proximity to US military bases, created a series of works called "Home" based on his experiences while studying abroad in Philadelphia. The exhibition was held at the university's lecture hall gallery, offering a unique opportunity to view the series of works by this leading artist over the course of ten days. On December 16th, 2022 (Friday), Yonaha and Setsuko Ozawa, who is also a researcher of art history, held a lecture and discussion. Ozawa accurately and provocatively positioned Yonaha within the context of modern and contemporary art history, as well as the history of Okinawan painting. During the lecture, Yonaha shared some of the emotional experiences that underlie his creations, which often involve spending a lot of time studying the lines and brushes of large works such as "The Battle of Okinawa" by Toshi and Iri Maruki.

#### 【対照日本語部門主催】

#### 第37回「外国語と日本語との対照言語学的研究

2022年12月10日(土) 14:00~17:50 オンライン開催

(発表者)

#### 岩崎加奈絵氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 日本学術振興会特別研究員 (PD) 専門: ハワイ語

#### 安達真弓氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教 専門:言語学

#### 澤田淳氏

青山学院大学教授 専門:語用論、文法論

## ハワイ語の空間ダイクシス-3つの要素と疑問点-岩崎加奈絵氏

本発表では、ハワイ語の空間表現のうち、特にダイクティックな特徴を有する三つの機能語を取り上げた。具体的には、ハワイ語の言語学的特徴を概観したあと、人称・時間・空間の三種のダイクシスに対応する要素にどのようなものがあるか簡潔に言及したうえで、空間ダイクシスに関係する要素(Directional、Location noun、Demonstrative)について詳しく述べた。

一つ目に取り上げた要素は、Directional(方向詞)と呼 ばれる、四つの語からなる類である。これは、典型的に は先行する内容語の示す動作の展開する方向を明示す る、任意の要素である。 具体的には aku "away from <the speaker>", mai "toward <the speaker>", a'e "upwards", iho "downwards" の四つがあり、hele「移動する」に付けば、hele aku「行く」、hele mai「来る」、hele a'e「のぼる」、hele iho「く だる | のようになる。また、物理的な方向に加え、時間・比較 の表現においても使用される。これまで発表者は、特に発 話者ができごとの場に参与しない三人称の物語文において この要素を使用する際、「動作の向き」を判断する視点を誰・ どこに置くのか/置くことができるのか、という点につい て注目してきた。その一環である、具体的な物語の展開に ともなう、視点の置かれる位置の変遷を追う試みについて 紹介し、1) 視点が置かれるのは人を中心とした有生物が多 いが、無生物(モノや土地)にも置かれうること、2)人の中 では主人公に視点が置かれることが多いものの、単純に登 場場面が最も多いからである可能性もあり、また主人公か ら視点が移動することもあり、選好されるとまでは言い切 れないこと、3) 土地に視点が置かれる場合、主要人物にとっての「ホーム(家・拠点・故郷など)」と考えられるものが多いが、用例を見る限りそれに限られるわけではないこと、を提示した。

加えてハワイ語と最も近い系統関係にあるとされるマルケサス語における方向詞にも言及し、両言語間では、特にナラティブにおいて方向詞の使用規則が異なることが示唆されると述べた。

二つ目の要素はLocation noun(位置名詞)と呼ばれるものである。これらは「〇〇の前/後/中/外/間」など、ランドマークを用いて相対的な位置関係を表す要素である。形式面の記述は用例をうまく説明している一方、closed classとされつつも記述によりこれに含まれる要素の数・種類に差があり、それが何によるものか判然としていないこと、また、例えば「後」といっても、車内の後部・車外の後部・車の進行方向とは逆の少し離れた地点などのうちどこを指しうるのか、といった具体的な点については、現状の記述には見られないことを指摘した。

(岩崎加奈絵)

## ダイクシス表現としてのベトナム語指示詞 一空間・時間・人称・談話— 安達 真弓

本発表では、ベトナム語の概要、及び、ベトナム語におけるダイクシス表現の研究状況についてまとめた後、ベトナム語の指示詞の特徴について論じた。

ベトナム語は、オーストロアジア語族に分類され、クメール語などと系統関係にある。基本語順はSVO、主要部先行型である。屈折や活用といった語形変化がなく、孤立語的な特徴を有する。その他、主に音声的な特徴の違いによって北部・中部・南部の3つの方言に大別されること、そのうち標準的だと考えられている北部方言は6つの声調を区別すること、また、本発表はラテン文字を基本とする正書法を用いることなどを初めに確認した。

次に、ベトナム語におけるダイクシス表現研究の現況について概観した。ダイクシス表現とは、Anderson & Keenan (1985: 259) の定義によれば、「その単文における解釈に、それが出現する発話の言語外的文脈の特性への参照を必須とする言語的要素」のことである。ベトナム語のダイクシス表現について日本語で著されたものとして、指示詞(安達2021)、方向移動動詞(Do 2021)、待遇表現(清水 2017)、視点表現(ダンタイ 2017)などの文献が挙げられるが、包括的な研究はまだ緒に就いたばかりと言える。

最後に、ベトナム語の指示詞の形態的・機能的特徴について述べた。ベトナム語指示詞は近称・中称・遠称の3系列の

指示詞を持つ。発話の場にある対象を指す空間指示において、近称は話し手の周囲を、遠称は直接認識できる範囲を、中称はそれを超える広い範囲を指し示す。時間指示において、近称は発話時に近い時間を、遠称は発話時から遠い過去/未来を、中称は照応的な(先行詞を持つ)表現において使用される。人称指示において、指示詞は3人称を表す場合に親族名称に後置されることがある。同一テキスト内の発話の前後関係を指し示す談話指示について、聞き手の注意を話し手の以前の発話に向けるために指示詞が感動詞として使用されている例や、聞き手との情報共有を志向するために指示詞が文末詞として使用されている例を紹介した。

#### (参考文献)

Anderson, Stephen R. & Edward L. Keenan (1985) Deixis. In: Timothy Shopen (ed.) Language typology and syntactic description: Grammatical categories and the lexicon, 259–308. Cambridge: Cambridge University Press.

Do Thi Van (2021)「ベトナム語の方向移動動詞:日本語との対照」博士論文、山口大学

安達真弓(2021)『ベトナム語空間ダイクシスとその展開ー 指示詞から文末詞・感動詞へ一』東京: 勉誠出版

清水政明 (2017)「ベトナムの社会とことば」『ICD NEWS』 71: 7-26.

ダンタイ クインチー (2017)「ベトナム人日本語学習者の物語の描写における視点表現の特徴 一日本語母語話者との比較を通じて一」『一橋大学国際教育センター紀要』8:93-105.

(安達 真弓)

## 日本語ダイクシスの歴史 一直示動詞、敬語、指示詞を中心に一 澤田 淳

敬語、授受表現、指示詞などの研究は文法史においても厚みを有するが、日本語文法史研究の中で、「ダイクシス(直示)」が研究分野の1つとして取り上げられるようになったのは、比較的最近のことである。先駆的研究として、近藤(1986)、金水(1989)による研究がある。本講演では、近藤(1986)、金水(1989)、および、発表者のこれまでの一連の研究を踏まえ、それらをさらに拡張させる形で、日本語ダイクシスの歴史について考察をおこなった。以下、授与動詞「やる/くれる」、移動動詞「行く/来る」、指示詞、敬語の順に、その運用の歴史を概観する。

現代語(共通語)の「やる/くれる」は、視点制約を有する 直示授与動詞である。一方、古代語では、「くれる」(古代語 では下二「くる」)は、求心的方向への授与、非求心的方向への授与のどちらにも使われる非直示授与動詞であり、「やる」は、授与動詞ではなく「おこす」と対立をなす非求心的な直示移送動詞であった。中世期の間に「やる」が移送用法との類比(アナロジー)により授与用法を確立させ、非求心的授与領域内で「くれる」と「やる」が競合するに至ったが、通常の授与場面では、待遇的に中立的な、または、「くれる」に比べ相対的に丁寧な、「やる」の選択意識が高まり、「くれる」は次第に非求心的授与の意味領域から追い出されていき、求心的方向性の制約(受け手寄りの視点制約)を確立させていった。現代語では、今度は「やる」が下位待遇的意味を帯びている(帯びつつある)ことから、「あげる」の選択意識が高まっており、通常の非求心的授与領域において、さらなる語の入れ替えが生じつつある(澤田2020)。

現代語(共通語)の移動動詞においては、聞き手領域への話し手の移動を表す場合、「来る」は使えず、「行く」が使われる。一方、古代語では、「来(く)」が、話し手領域への移動のみならず、聞き手領域への話し手の移動に対しても使われていた。中世期以降、話し手による第三者領域や聞き手領域への移動に対して「来」は使われなくなり、現代語(共通語)に見られるような視点制約を確立させるに至っている。このような「来」(「来る」)の運用変化は、授与動詞「くれる」などの他の直示動詞の運用変化との関連で見た場合、「話者中心性」の顕現化の現象として捉えることが可能であり、また、指示詞や敬語の運用変化との関連で見た場合、聞き手のネガティブ・フェイスの顧慮という意味での「対人配慮性(ポライトネス)」の現れとして捉えることが可能である(澤田2016)。

現代語(共通語)の指示詞においては、聞き手領域内の対象はソ系列で指し示され、ア系列で指し示すことはできない。一方、古代語(特に中古語)においては、カ・ア系列が(英語のthat(あれ/それ)のように)本来的な遠距離領域指示に加えて、二次的に聞き手領域指示としても利用されており、聞き手領域指示として、カ・ア系列とソ系列が併用されていた。中世期以降、この領域内において次第にカ・ア系列が駆逐されていき、聞き手領域指示はソ系列のみによって指示されるようになった(澤田2011、2015等参照)。

現代語(共通語)では、「内外」の認識に基づき、話し手は外部の人の前で身内を(過度に)高めないという「内外型の身内敬語の抑制」が認められる。一方、古代語では、「上下」の認識に基づき、聞き手が身内よりも上位である場合には、話し手は身内を(過度に)高めないという「上下型の身内敬語の抑制」が認められる。日本語の身内敬語の抑制システムは、古代語から現代語に至る歴史的変遷の中で、「上下型の身内敬語の抑制」から「内外型の身内敬語の抑制」へと次

第に置き換わっていった(澤田2022a, b)。

以上のように、現代語(共通語)の直示動詞、指示詞、敬語の運用に見られる視点制約・人称的性質は、歴史的展開の中で変化・確立してきた。授与動詞では、事象内部の特定の参与者の側に話し手の視点が置かれるようになり、歴史的に視点制約が生じている。また、敬語、指示詞、移動動詞では、話し手領域と聞き手領域とを区分化し、両者の対立的視点を反映する聞き手顧慮の運用が歴史的に強まっている。

#### (引用文献)

金水敏(1989)「敬語優位から人称性優位へ一国語史の一潮 流一」『女子大文学 国文篇』40: pp. 1-17. 大阪女子大学.

近藤泰弘(1986)「敬語の一特質」築島裕博士還暦記念会(編) 『築島裕博士還暦記念国語学論集』85-104. 明治書院.

澤田淳(2011)「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』165-192. ひつじ書房.

澤田淳(2015)「ダイクシスからみた日本語の歴史―直示述 語、敬語、指示詞を中心に―」加藤重広(編)『日本語語用 論フォーラム1』57-100. ひつじ書房.

澤田淳(2016)「日本語の直示移動動詞「行く/来る」の歴史 一歴史語用論的・類型論的アプローチー」山梨正明他(編) 『認知言語学論考 No. 13』185-259. ひつじ書房.

澤田淳(2020)「日本語の直示授与動詞「やる/くれる」の歴 史」『国立国語研究所論集』18: 149-180. 国立国語研究所.

澤田淳(2022a)「日本語敬語の運用に関する語用論的研究―相対敬語の類型化をもとに―」近藤泰弘・澤田淳(編)『敬語の文法と語用論』114-182. 開拓社.

澤田淳(2022b)「中古日本語における敬語抑制のシステムについて一韓国語との対照を含めて一」青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)『日本語文法史研究6』25-59. ひつじ書房. (澤田 淳)



オンラインによる本研 究会には常時60名余りの 聴衆が参加した。研究者か らの質問に加えて発表者 による追加情報もあり、議 論が盛り上がった。

(谷口龍子)

Kanae Iwasaki's presentation titled "Spatial deixis in Hawaiian: three elements and questions," discussed the three functional words in Hawaiian that have particularly deictic features in spatial expression. Iwasaki briefly covered the elements corresponding to the three types of deixis, namely personal, temporal, and spatial, before describing in detail the elements related to spatial deixis (Directional, Location noun, Demonstrative).

Next, Mayumi Adachi's presentation titled "Vietnamese demonstratives as deixis expressions: spatial, temporal, personal, and conversations" provided an overview of the research status of deixis expressions in Vietnamese, and specifically discussed the characteristics of Vietnamese demonstratives.

Deixis expressions, as defined by Anderson and Keenan (1985: 259), refer to "linguistic elements that require reference to the extralinguistic context of the speech in which they appear in order to be interpreted;" comprehensive research on deixis expressions in Vietnamese is still in its early stages.

Vietnamese demonstratives consist of three series: proximal, medial, and distal. For spatial references in a conversational setting, proximal denotes the immediate area around the speaker, distal denotes the area that can be directly recognized, and medial refers to a broader range beyond that. For temporal reference, proximal refers to the time close to the time of speech, distal refers to the distant past/future from the time of speech, and medial is used in referential expressions with antecedents. For personal reference, demonstratives may follow kinship terms to indicate third-person reference.

Jun Sawada's lecture, titled "The History of Japanese Deixis - Focusing on Demonstrative Verbs, Honorifics, and Demonstratives," analyzed the historical development of Japanese deixis by discussing awarding verbs "yaru/kureru," movement verbs "iku/kuru," demonstratives, and honorifics.

The perspective constraints and personal characteristics observed in the use of modern demonstrative verbs, demonstratives, and honorifics have evolved and been established through historical development. In awarding verbs, the speaker's viewpoint is placed on a specific participant within the event, resulting in a historical perspective constraint.

In honorifics, demonstratives, and movement verbs, the speaker's domain and listener's domain are distinguished, and the use of listener consideration reflecting the opposing viewpoints of both parties has more prevalent through history.

This research workshop was well-attended, with over 60 online participants. The presenters willingly provided further information in addition to answering questions from researchers, resulting in a lively and informative event.

#### 【比較日本文化部門主催】

## 東アジア連続講演会 第16回 『境界と路上を考える』 在日韓国人政治犯救援運動の軌跡と課題 講師: 石坂浩一氏

2023年1月27日(金)17:00~ オンライン開催

この講演会は、1970年 代から80年代にかけて、在 日韓国人政治犯の救援運動を中心的になってきた 石坂氏による貴重な報告 を共有する機会となった。 1975年11月に起きた、在日韓国人留学生21人が検挙 される「11.22事件」が象徴 するように、韓国で「在日 同胞スパイ捏造事件」と呼ばれる一連の冤罪事件は、



朴正煕、全斗煥らの軍事独裁政権時代を象徴する政治弾圧 であった。日本では、個別「政治犯」の救援組織のほかに、「在 日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会」と「在日韓国人 『政治犯』を支援する会全国会議」の二つの組織が形成され、 全国的に運動が展開された。元政治囚たちは、ある日突然 連行・投獄され、死刑判決を受けながら十数年にわたる獄中 生活を強いられた。T·K生による『韓国からの通信』が連載 されていた時代に、全国的な救援運動が広がるなかで、政 治囚たちの家族や個別の救援にこだわってきた石坂氏は、 多くの資料を参照しながら、当時の新左翼運動との関係、 政治的な路線の相違など、個別の救援運動と全国的な運動 に対する公平な評価を語られた。そうした資料のアーカイ ヴ化など、在日韓国人政治犯救援運動の研究が必須の課題 であることを再認識する時間であった。なお当日は、日本 における韓民統の韓国民主化運動の研究を進めている趙基 銀氏、本学の藤井豪氏の二人によるコメントを踏まえて、 活発な議論が交わされた。参加者は30名であった。

(友常勉)

The lecture offered an opportunity to share the insights of Ishizaka, a prominent activist who played a central role in the movement to rescue political prisoners of Korean descent in Japan during the 1970s and 80s. At a time when "Communication from Korea" by T.K. was being serialized and a nationwide rescue movement was gaining momentum, Ishizaka's focus was on the families of political prisoners and individual rescue efforts. Drawing on numerous sources, he provided a fair evaluation of the individual rescue efforts and the nationwide movement, including their relationship with the new leftist movement and the differences in political lines at the time. The examination of the sources underscored the importance of archiving such materials for future research on the movement to rescue political prisoners of Korean descent in Japan. The lecture was followed by a lively discussion, including comments from Ji-Yeon Jo, who is currently researching the Korean democratic movement in Japan, and Takeshi Fujii from TUFS.

#### 【国際日本語教育部門主催】

#### 2022年度第1回研究会

インターネット利用におけるセキュリティ 一日本語教師、学生・生徒、学校組織が安全に、 かつ安心して活用する際のヒント—

講師: Ako Suzki 氏(日本語ピクニック株式会社 CEO) 2023年2月27日(月)16:00~18:15 オンライン開催



オンライン日本語教育 実践や教育コンテンツ開 発・発信でご活躍のAko Suzuki 氏 (Nihongo Picnic 株式会社 CEO)を講師 に迎え、オンライン形式 で研究会が開催された。

2020年のコロナ禍以降、 オンラインでの日本語授 業が一般化し、個々の教師 や支援者がオンライン教 育を適切に実施すること

が求められる現在、Ako Suzuki氏は、オンラインレッスン実施にあたり、教師が留意すべきポイントを、(1)対面レッスンとオンラインレッスン、(2)授業録画視聴、(3)授業に使用するオンラインツール、(4)集客ツールとしてのSNS利用、に分けて明瞭に示され、その中で、2回のグループワークで参加者各自が、授業録画や仕事上のSNS利用の

留意点について、意見や情報を交換する機会も設定され、参加者の理解や意識の向上に大変役立つ内容であった。日本語コース情報の公開時の情報への授業録画の有無の情報を加えると良いことや、信頼できるオンラインツール選択や公開・共有設定の手続きへの配慮を怠らないことなど、国内外の大学などの組織に属する日本語教師やフリーランス教師、支援者、大学院生、事務局担当者、インターネットサイト運営管理を行う方など56名の参加者それぞれが教育および研究、サイト管理などに早速活用できるアドバイスをいただくことができ、有意義な時間となった。

(鈴木美加)

The seminar was conducted online with the guest speaker Ako Suzuki, the CEO of Nihongo Picnic, who is actively involved in online Japanese language education practices, and educational content development and dissemination. Since the beginning of the COVID-19 pandemic in 2020, online classes for Japanese language education have become prevalent, and individual instructors and supporters have been facing the task of implementing appropriate online education practices.

During the seminar, Suzuki described the important tips for instructors conducting online lessons in four categories: (1) in-person lessons and online lessons, (2) viewing lesson recordings, (3) online tools for classroom use, and (4) uses of SNS for marketing purposes. The seminar also included two group work sessions where participants exchanged opinions and information about viewing recorded lessons or using SNS for work purposes. Overall, the seminar was helpful in improving participants' understanding and awareness of security in conducting online education.

### 【対照日本語部門主催】

#### 第37回「外国語と日本語との対照言語学的研究

2023年3月4日(土) 14:00~17:50

オンライン開催

(発表者)

#### 水谷修氏

東京外国語大学 専門:言語学、ポルトガル語

#### 内原洋氏

東京外国語大学 専門:言語学

#### 峰岸真琴氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー 東京外国語大学教授 専門:言語学

## ポルトガル語の haver と ter について 水沼修氏

現代ポルトガル語では、「所有」を表す本動詞(例:A Ana tem uma casa grande、「アナは大きな家を持っている。」)として、または「複合時制」の助動詞(例:O Pedro tinha saído quando a Maria telefonou、「マリアが電話した時、ペドロは外出中だった。」)として、専らterが用いられる。一方、haverは、「存在」(例:Há um jardim zoológico nesta cidade、「この街には動物園がある。」)を表す形式や、「時間」(例:O Rui tinha concluído o curso havia uma semana、「ルイはその課程を一週間前に修了していた。」)を表す形式で用いられることが多い。また、haver及びterは、「前置詞+不定詞」を伴う形式でも使用される。特に「前置詞de+不定詞」を伴って使用される場合、前者は「義務・未来」(例:O que hei-de fazer?「私は何をすればよいのだろうか。」)を、後者は「必要性・義務」(例:Tu tens que comer mais、「君はもっと食べなければならない。」)を表すとされる。

俗ラテン語からの流れを引き継ぎ, haverとterは, ポル トガル語の初期段階において、「所有」を表す動詞として用 いられていたが、それぞれが表す意味、もしくは、それぞれ が所有する「対象物」の種類に違いが見られた. haver が比 較的多くの種類の「所有対象物」と共起できるより一般的 な動詞であったのに対し、terは限られた文脈においてのみ 「所有」を表す動詞として用いられたと考えられている. 中 世の時代を通じて、「所有」を表す形式における haver の優 勢が続いたが, 徐々に haverと ter の交替が進められていっ た. そして、「所有」を表す動詞としてのhaverの後退は、15 世紀の半ば以降,徐々に顕著になっていった.また,これと 並行して,「前置詞+不定詞」を伴う形式,過去分詞を伴う 形式、「存在」を表す形式における haver の使用頻度が時代 の経過とともに高まっていく. しかしその後, これらの形 式(「存在」を除く)においても ter が優位に立ち, 現代語に おいては、haverの使用は非常に限られたものとなっている.

また、ポルトガル語は、他のロマンス諸語同様、ラテン語の「HABERE +過去分詞」の形式を受け継ぎ、これを複合時制形式として発展させたが、この形式においても、歴史の中でterがhaverに取って代わる形となった。様々な意見はあるものの、複合時制の助動詞としてのhaverとterの交替の時期については、概ね15世紀~17世紀に位置付ける研究者が多い。

本発表では、リスボン新大学の中世ポルトガル語電子 化コーパス Corpus Informatizado do Português Medeival に収録されている13世紀~15世紀のテキストや、Fernão Mendes Pinto や Diogo do Couto による16世紀後半に書か れた年代記などを対象としたこれまでの調査結果を踏まえ、 「所有」を表す形式と、「複合時制」形式におけるhaverとter の交替のプロセスがそれぞれどのように進んでいったのかについて考察を行った。その上でこれら歴史的推移が、「所有」を表す形式におけるterの使用、「存在」を表す形式におけるterの使用(ブラジル変種)、「反復・継続」を表す現在完了、複合時制形式におけるhaverとterの併用など、ロマンス語の枠組みにおける現代ポルトガル語の特徴につながっているという点を確認するとともに、特に16世紀以降の変化についてはまだ明らかにされていないことも多々あるため、今後詳細な調査を行う必要があることを指摘した。

(水沼修)

## 日本語とメキシコ先住民語の自他交替 内原洋人氏

メキシコで話される先住民語であるサポテク語やトラパ ネク語(いずれもオトマンゲ諸語)は、日本語と同様自他交 替を示す。本発表では、これらの言語の自他交替と日本語 の自他交替の類似点と相違点について、詳細に考察した。 まず、各言語について、他動詞から自動詞が派生される傾向 が強いのか(自動詞化型言語)、或いは自動詞から他動詞が 派生される傾向が強いのか(他動詞化型言語)、或いは日本 語のようにどちらのパターンも同様にみられるのか(両極 型言語)について、国立国語研究所の調査票(https://watp. ninjal.ac.jp/)に基づいて観察を行い、サポテク語・トラパネ ク語の両方について他動詞化の傾向が強いことを結論付け た。次に、有対他動詞と無対他動詞の意味特徴の違いに着 目し、日本語では有対他動詞は働きかけの結果の状態に、 無対他動詞は過程の様態に着目することが報告されている が(早津1989)、これがトラパネク語やサポテク語にも当て はまるか否かについて考察を行った。結果として、トラパ ネク語についてはデータが不足しておりまだ一般化は難し いものの、サポテク語にはこの傾向はみられないことを示 した。これはサポテク語では形態語彙的なヴォイス交替で ある自他交替と、形態統語的なヴォイス交替である受動・使 役が分化していないためではないかと結論付けた。最後に、 これら三つの言語を自動詞化・他動詞化型言語であるのか、 また形態語彙的ヴォイスと形態統語的ヴォイスが分化して るか否かの観点から分類し、日本語は両極型で形態語彙的 ヴォイスと形態統語的ヴォイスが分化しており、トラパネ ク語は他動詞化型で二つのヴォイスは日本語と同様に分化 しているのに対し、サポテク語はトラパネク語よりも他動 詞化型でさらに二つのヴォイスも分化していないと結論付 けた。

(内原洋人)

## 言語の分析と対照法について一時と出来事の表現を例に一 峰岸真琴氏

言語の対照研究は、言語教育・学習、コミュニケーション障害、翻訳など、多様な現場での応用が期待される。しかし、言語研究の諸分野が高度化・細分化し、専門領域ごとに新概念が過剰に提案された現在、領域を横断する対話が不可能になりつつある。そこで本講演では、2言語の対照研究のための実践的方法論として「複層分析記述法」を提案し、同法を用いての具体的な分析例として「タイ語と日本語の時の表現」の対照をとりあげ、方法論の有効性を検証した。

「複層分析記述法」には、次のような特徴がある。第一に、縦軸に音韻・語彙(形態法)、統語、意味といったレベルの分析を複層状に重ね、横軸に各層の時間的局面を配置して分析することで、各レベルを細分化した文脈として分析できることである。第二に、分析の際に、日本語の場合であれば「名詞、助詞、動詞、助動詞」など、最小限の基礎的な言語学的概念・用語を選ぶことである。これは「教育・研究の現場での記述」における実行可能性を高めるためであると同時に、分析概念の精密さよりも記述用語の安定性を目指すためである。第三に、2つの言語を媒介概念なしに、直接比較対照できることである。これによって、分析・記述の目的に応じて柔軟に層を設定することが可能になる。

さらに本講演では、「複層分析記述法」の有効性を検証するため、「タイ語と日本語の時の表現」の対照例を検討することにより、以下の事実を明らかにした。第一に、タイ語と日本語は形態法、語順などの言語類型的観点から見ると対称的な相違を持つ言語であるが、複数レベルの情報の同時並行処理を前提とした複層分析記述の結果、両言語の共有する「時の類像性」という特徴が明示化されたことである。第二に、タイ語・日本語とも、「いる、みる、おく、いく、くる」が同じ層(ある期間の経過と回顧・展望を表す層)において文法化されていること、それにも関わらず、従来の日本語の分析が「ている」のみを重視してきたことである。第三に、タイ語のいわゆる「完結」を表すとされる leew と日本語の「過去・完了」を表すとされる「た」の対照により、次のような事実が明らかになった。

ケース1:「宿題をやった」の「た」は、宿題の「完了」を表すのではなく、「宿題への着手」を表すに過ぎず、「宿題の完了」は語用論的推意による意味であること。

ケース2:「うちに帰った」の「た」は「過去」を表すのではなく、「帰宅のための移動への着手」を表すに過ぎず、「うちに帰り着いた」という状況は、語用論的推意による意味であること。

以上のようなタイ語・日本語の時の表現の分析の結果、複層分析記述法は、言語の各レベルの形式が表す意味だけで

なく、発話全体におけるそれぞれの役割を可視化するため に有効であることが明らかになった。また今後の課題として、 従来の日本語のアスペクト研究を全面的に見直すべきであ ることを指摘した。

(峰岸真琴)



オンラインの会場は80 名以上の参加者があり、質 疑応答も多く大変盛況で あった。特に、峰岸氏の講 演で提案された「複層分析 記述法」はこれまでの言語 研究の枠組みと異なる新 しいパラダイムであり、多 くの研究者より関心が寄 せられた。

(谷口龍子)

## "Portuguese verbs 'haver' and 'ter" Mizunuma Osamu

This presentation examined the process of alternation between the verbs "haver" and "ter" in the forms expressing "possession" and in the "compound tense" forms, based on previous research on texts from the 13th to 15th centuries contained in the Corpus Informatizado do Português Medieval, an electronic corpus of medieval Portuguese at the New University of Lisbon, and chronicles written in the late 16th century by Fernão Mendes Pinto and Diogo do Couto. Mizunuma highlighted the need for further investigation, as there are still many uncovered changes especially after the 16th century.

## "Self-causative alternation in Japanese and Mexican indigenous languages" Hiroto Uchihara

The indigenous languages spoken in Mexico, such as Zapotec and Tlapanec (both belonging to the Otomanguean languages), exhibit self-causative alternation similar to that in Japanese. This presentation discussed the similarities and differences between self-causative alternation in these languages and in Japanese. Uchihara concluded that while Japanese has differentiated between morphological-lexical voice and morpho-syntactic voice in a bipolar manner, Tlapanec has differentiated the two voices like Japanese in its causative verb form, but Zapotec, which is more causative compared to Tlapanec, has not differentiated between the two voices.

## "Language Analysis and Comparative Method: Examples from Temporal Expressions" Makoto Minegishi

As language research becomes more specialized, cross-disciplinary dialogue has become increasingly difficult in contrastive studies of languages. In this lecture, Makoto Minegishi proposed the "Multilayered Analytic Method" as a practical methodology for contrastive research between two languages. Minegishi demonstrated the method's effectiveness by analyzing specific examples of temporal expressions in Thai and Japanese.

By examining the contrastive examples of temporal expressions in Thai and Japanese, Minegishi highlighted three facts. First, despite being languages with symmetrically different characteristics from a typological perspective, the method revealed the "temporal similarities" shared by both languages. Second, both Thai and Japanese have grammaticalized "iru, miru, oku, iku, kuru" in the same layer, but traditional analyses of Japanese have focused only on "teiru." Third, contrasting Thai's so-called "perfective" particle "leew" and Japanese's "past-perfect" particle "ta" reveals that they serve different functions as below.

Case 1: The "ta" in "yatta shukudai" ("did homework") merely indicates "taking on the task of homework" and the completion of homework is implied through pragmatic inference.

Case 2: The "ta" in "uchi ni kaetta" ("went back home") merely indicates "taking on the movement towards returning home" and the situation of actually "arriving back home" is implied through pragmatic inference.

#### 【国際日本語教育部門主催】

教育(教師、学生)と教材作成(開発を含む)にかかわる著作権 講師:我妻潤子氏

(株式会社テイクオーバル所属、東京藝術大学非常勤講師)

2023年3月9日(月)15:00~17:00

オンライン開催

現在、多くの教育機関において、インターネット上の情報の教育利用や書籍データのオンライン教育への活用が行われるようになり、情報の適切な利用について捉える機会として、研究会が開催された。著作権に関する専門家である我妻潤子氏(東京芸術大学非常勤講師、株式会社テイクオーバルコンテン



ツビジネス事業部長)を講師に招き、教材利用者の立場と作成者の立場の双方からの視点により、著作権の基本を学んだ。

研究会はオンライン Zoom で行われ、参加者は、事前に著作権に関する5分程度の動画を視聴、その上で研究会に臨むという反転学習形式で進められた。講師の我妻氏は、参加者からの事前質問を踏まえ、(1) 著作権の適用範囲(対象者の人数や特性)、(2) 著作権の定義および著作権の分類、(3) 利用者の立場での許諾手続きや例外、(4)権利者の立場から考える「著作権」とその期間、(5) クリエイティブコモンズ・ライセンス(CC)とその種類、といった非常に多岐にわたる内容について、各概念の本質を嚙み砕いて身近な例ともに丁寧に解説くださった。

国内外の教育・研究を行う日本語教師、大学院生、事務局担当者、出版編集者など、参加者80名に対する事後アンケートでは、「具体的な事例により、著作権のポイントが明確に理解できた」「著作物の利用範囲の明示により、社会全体の適切で円滑な著作物利用の促進につながる」といったコメントから、今回の我妻氏の著作権のお話が参加者の腑に落ちる意義深いものとなったことがわかる。

(鈴木美加)

Currently, many educational institutions are beginning to utilize various online information resources and book data for online education. This workshop was held in response to such trends to provide an opportunity to understand the appropriate use of information. Junko Azuma, an expert on copyright (part-time lecturer at Tokyo University of the Arts, Head of the Content Business Division at Takeover Co., Ltd.), was invited as a lecturer, and participants learned the basics of copyright from both the perspective of educational material users and creators.

Azuma offered detailed explanations of relevant concepts in response to the pre-seminar questions from participants, including (1) the scope of copyright application (number and characteristics of the subjects), (2) the definition and classifications of copyright, (3) licensing procedures and exceptions for users, (4) "copyright" and its duration for rights holders, and (5) Creative Commons licenses (CC) and their categories,

【近日開催のイベント】 比較日本文化部門共催ワークショップ

描くこと、語ること、物語ること 一部落出身者たちの表現一

2023年5月13日(土)14時~ 場所:東京外国語大学 海外事情研究所 (研究講義棟4階 427教室)

小田原のどか

(彫刻家・評論家、多摩美術大学他非常勤講師) 「「転向」の自画像:西光万吉を日本美術史に位置づけるために」

> 後藤田和(日本近代文学、広島商船高等学校教員) 「運動と表現のはざまで:土方鉄の文学創作

友常勉(日本思想史、東京外国語大学教員) 「中上健次、その脱構成的政治[distituent politics]」

> 【コメンテーター】 中上紀(作家) 【司会】

高榮蘭(日本近代文学、日本大学教員)



発行:東京外国語大学国際日本研究センター 〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp ウェブサイト URL jttp://www.tufs.ac.jp/icjs/

